

第二言語としての英語学習における Real Life Experience 法の提案 The proposal of Real Life Experience Method for ESL learning

野田 浩平^{†‡}, 松岡 良彦[†]
Yoshihiko Matsuoka, Kohei Noda

[†]株式会社ココロラボ, [‡]スターティングポイントイングリッシュアカデミー
Kocoro Laboratory Inc., Starting Point English Academy
noda@kocorolab.com, contact@sp-ea.com

Abstract

This article proposes the new language studying method “Real Life Experience (RLE) method.” After the review of current existing methods and our new RLE method, we also introduce statistical and case study of the method. As a conclusion, we conclude that the effect of this method cannot be calculated numerically in comparison with other method but theoretically the method has a certain effect to bridge between English language learning in class room and actual world where English is used.

Keywords — Language acquisition, ESL, Learning by doing, Experiential learning

1 はじめに

日本の学校教育において、英語学習は中学及び高校の6年間で学校で学ぶ教科の一つとして多大な時間を用い、勉強されている。また、学校教育以外でも一般の英会話学校などで英会話を中心に勉強されている。しかしながら実態としては、日本人の大多数が英語を使いこなせるようになっているわけではなく、以下のような統計結果が挙がってきている。

すなわち、9割の中高生が社会での英語の必要性を感じ、しかしながら5割弱は自身は将来英語を使うことはないであろうと予想している。[1]

そして大人になってからは20代から60代のどの世代でも3分の2前後の比率で英語が苦手であるという意識が生まれる状況となっている。ちなみに英語が苦手ではないと言う人の比率は2割にも満たない。[2]

ここから言えることは中高の学校教育で6年勉強していて、必要性は感じつつも将来使わないだろうなとも思っている英語を勉強し続けた結果、大人になり英語が苦手であるという意識を持つ人が大量に発生するという事象が発生しているということである。

ここで、根本的な課題として学校で教えられている英語学習の方法は苦手意識を生むことはありこそすれ、効率出来ではない学習方法ではないのではないかという仮説が生まれる。そしてそこに対する解決策として認知科学的に最も妥当で効果的な言語習得法を提案す

ることが本稿の目的である。

2 認知科学的に妥当な言語習得の過程

人間が言語をいかに習得し、理解するようになるかについては、Chomskyの生成文法(generative grammar)理論からSchankの自然言語理解の理論まで数多く提案されているが基本原理は以下のように考えられるであろう。[3]すなわち、例えば母語を初めて習得する乳幼児の場合、自身の身の回りで頻度が高く話されている単語や言い回し(文章)を多数回認知するために記憶するという基本の記憶過程があり、それに加えて、生存により有用な情報であると認識された場合、さらに記憶の可能性が上がるというものである。すなわち、ポジティブ及びネガティブな感情に結びつくものはより覚えやすいというものである。報酬及び罰の感情価が付与される体験(とそこで現れる単語、言い回し)をより覚えるというものである。

乳幼児ではなく、ある程度の年齢の子供から大人の場合も基本的には同じ原理で、まずは社会的生活を営むための生活環境があり、そこで頻出する表現やより生存に必要と思われる強い感情価が付与される体験に関連する表現が記憶されるであろう。ただ、乳幼児より大きな年齢の子供と大人の場合は母語はすでに習得しており、新しく言語を習得する場合は、それは第二言語の習得という環境になる。これがまさに日本における英語学習(第二言語としての英語学習)でも適用できるはずの言語習得の基本原理である。しかしながら、これまでの学校教育では実際に言語が使われる環境は無視して(逆に、使用される環境を日本における教室内では作り出せないという制約もあるかと思うが)教科書を用いて学問的に単語、語彙、文法、読解、作文などを行う授業が行われてきた。また、英会話学校でも、教室内での教師と生徒との英語を勉強するための会話という環境での英語学習が行われてきた。

その中でこれまで提案されてきたより効果的である

と思われる第二言語習得の学習法や、第二言語習得に使用できそうな学習科学上の方法論を次項で概観する。

3 これまでに提案された効果的と思われる言語学習法、及び援用できる学習科学概念

より言語が使用される環境に即して言語を習得しようという方法論はこれまでもいくつか提案されてきている。

例えば1800年代後半から Berlitz により提案されたベルリッツメソッド®は母国語を介さずに英語のみで英語を会話ベースで習得するという語学留学や日本国内の英会話学校、あるいはスカイプ英会話の手法の源流となる手法である。[4]ここでは、英語を使用する日常の場면을題材に英語で、必要となる語彙や表現、文法などを学んでいく。しかし、根本的に環境が教室の中での集合レッスン、あるいはマンツーマンレッスンのため、実際に生活の中で英語が使われている環境を見ずして仮想的に生活場면을想定して必要な表現を学んでいくという問題が存在している。

教室の中という環境だけだと、やはり、その学んでいる単語、表現の重要性も理解できなければ、コミュニケーションへの成功/失敗のプレッシャーもなく、さらに先生が生徒のレベルに合わせて調整するという非日常的な状況が起こるため、学習効率は落ちると考えられる。

Immersion 法は第二言語の習得を対象第二言語で授業を行うことで達成しようという手法で1960年代のカナダから始まり、世界中に広がってきた。[5]この方法は大人というよりは子供の言語習得の側面から発展してきて、学校での対象言語の授業だけで開く、他の授業の科目も対象言語で行うことにより、より対象言語の使用可能範囲を広めようという手法が取られている。もちろん、大人の言語習得に対しても Immersion 法は適用されることもあり、子供に限っているわけではない。また、言語以外でも学校の教科を対象言語で学ぶので学校場面における対象言語の使用は上達することが考えられるが、例えば家庭の中や街中での言語使用の場面は Immersion の場面としては設定されていないという Berlitz 法と同じ構造的な問題がある。

1980年代にインドのバンガロールで始まり、世界に広まった第二言語の学習手法として Task Based Language Teaching/Learning 法がある。[6] これは情報ギャップのあるタスクを同定し、それに対し事前

に学習を積んでそのタスクを遂行するという実施する作業を絞り込んで学習する手法である。例えば商店の売主と顧客の設定などでロールプレイを行うなどの場面がある。ただ、この手法も場面を特定し、その場面で使いこなせるように目標を絞り学習するのは良いが、あくまで教室内でのロールプレイになることが多く、実生活に結びついていないという問題点は残る。

言語習得とは別に学習科学、人材育成の観点から効果的なスキルの習得法としても幾つかの概念があがっている。

例えば、元々自然言語理解の研究を行っていた Schank は言語理解の研究から派生して学習科学全般への研究に進み、Learning by Doing, Learning by Failure, Goal-based Scenario などの概念で、スキル習得の方法論を子供の学校教育と大人の学校教育、及び企業などの人材育成の方法論として展開した。[7] この概念は対象知識やスキルを実際に使用し、失敗体験を通じて学習することを狙いとしている。ここで、対象とする学習分野を明確にし、その分野の目標(Goal)や手段(Plan)などの知識表現を網羅した形で体験できるようにシナリオ(Scenario)を構成することが重要となる。大人の学習では企業研修や軍隊の実戦訓練の E-learning などにその応用が見られるが、あくまでも E-learning が研修としての実際の業務場면을想定しての仮想プロジェクトの実行など、実際の場面とは厳密には異なるが、実際の場面と可能な限り近くなるよう作り込むという点で、上記に挙げた第二言語習得法と比べてはるかに現実場面に近い形で対象知識・スキルを習得する方法論となっている。ただし、この概念を言語習得に応用した事例はこれまでにない。

ただし、筆者の事例として、筆者が Schank がアドバイザーを行っていた Accenture(当時 Andersen Consulting)にて1990年代後半にコンサルティング業務についての Goal Based Scenario(GBS)に基づく企業研修を受講した際に、当時、英語が一度も使ったことがなく、話せない状態で3週間の英語による GBS 研修を受けたのち、TOEIC の得点が3週間で180点上昇した経験を持つ。ちなみにこの研修受講時に語学としての英語の学習は一切行っておらず、あくまでコンサルティング業務についての研修を受けていたのみである。

他に Kolb の経験学習(Experiential Learning)モデルも企業の人材育成の文脈では座学で知識、スキルを学ぶのではなく、実際に体験を行い、それに対する内

省から概念化を行い、新たな場面で施行するという実体験を通じて学習する学習観である。[8]これも Schank のモデルと同様、言語習得に対して述べているモデルではないが、実体験を通じてなんらかの知識、スキルを習得するという学習観は同じである。

さてこれらの過去の言語習得法や学習科学の理論を紐解き、第二言語としての英語習得を考える時、理想的な学習モデルの仮説が設定される。次項では筆者らが提案する仮説について述べる

4 RLE(Real Life Experience)法

前項まででこれまでの日本における英語の言語習得の課題と、それに対する既存の言語習得法、及び学習科学の方法論から援用できそうな概念を概観してきた。

さて、大人の自然な言語習得として必要な条件をあげると以下の通りとなるであろう。

- ・ 対象言語において学習する場面、目的の同定
- ・ 実環境での対象言語が使用されている場面の観察
- ・ 実環境での対象言語の使用実践
- ・ 実環境で用いられる語彙、表現の事前習得
- ・ 実際の訓練後の省察
- ・ その後の継続使用

これらの前提を踏まえ、筆者らは所属先である Starting Point English Academy のカリキュラムを上記の前提条件が踏まえられるようなカリキュラムとして提案する。これを Real Life Experience(RLE)法と名付ける。

特徴としては、まず、大人の言語習得の過程としては総花的に全場面での言語使用を目指すのではなく、特定の場面で使用できるように目的を定め、その場面での使用が可能になったら他の場面でも使用できるようにできる場面、範囲を広げていくという方式をとる。それぞれの場面には達成すべき課題目標（これをミッションと呼ぶ）を定め、それを達成するために英語を用いてコミュニケーションを行う。

これは Schank の Goal Based Scenario と同様の考え方で目標を明確化するということである。

しかしながらここで対象言語のスキルについて、初級者か中級者か上級者かにより、目標をどのように設定するかが問題となってくる。初級者の場合、対象言語の語彙や表現がまだ十分に使いこなせるレ

ベルになっているわけではないので、任意の場面や目標を設定するのではなく、最低限、街中で生活出来る表現を習得できる場面で英語を使用することを達成すべきミッションとして設定し、それを週に2場面、4週間、8ミッションこなすことにより初級者の英語使用の Goal Based あるいは Mission Based のカリキュラムとして設定する。

ちなみに標準的なカリキュラムの1日の授業は表1のように設定されており、月曜から金曜まで朝の8時から夕方5時まで、昼の12時から1時の昼食時間を除いて1日8時間英語を学習するようにカリキュラムを組んでいる。また、初級者向けの RLE1 クラスでは水曜日と金曜日の午前10時から12時までが街に出てミッションをこなす時間に充てられている。それに向けて月曜日から火曜日は水曜日のミッションに向けた準備としての授業を受け、水曜日にミッションから帰って来たらそのまとめを行い、プレゼンを行うように準備をし、振り返りのプレゼンを行う。金曜日と同様である。

表. 1 授業の内容と時間割例

8時	グループ/スピーキング
9時	グループ/発音
10時	語彙
11時	RLE作文
12時	昼食
13時	自習
14時	RLE読解
15時	RLE発音 /スピーキング
16時	RLE スピーキング

科目の中で RLE と冒頭についている科目は RLE 法のミッション用にカスタマイズされた専用の授業となっており、RLE 作文であれば RLE のミッションに必要な質問や会話の文章の作文などを準備することになる。RLE 読解であればミッションで必要となる分野の知識の事前読解となる。

また、グループとについている科目はグループレッスンでフィリピン人教師1名に対し、学生が5名以内の複数人で行われる。他の科目は教師1名に対し、

学生 1 名のマンツーマンレッスンである。

初級者向けのミッションの例は例えば以下の通りである。

- ・公園で街中の人にインタビュー/会話
- ・市場（いちば）で店主やお客さんにインタビュー/会話

初級者向けのミッションといっても、街中にで一般市民に話しかけるので話しかけた相手が初級者向けに簡単な英語で話してくれるとも限らず、あくまでも初級者としてミッションの選択で調整されているのは、あまり専門的な会話を必要とする場面（何かの専門職の専門家との会話など）ではなく、日常生活で世間話として可能な場面の設定をする、あるいは日常生活でまず最初に必要となるような場面の設定ということである。

ちなみに中級者向けのカリキュラム RLE2 におけるミッションの例は以下の通りである。

- ・授業実施
- ・販売体験

例えば小学校での授業を実施するために、なんらか教える事項のファシリテーションを準備したり、プレゼンテーションを準備する、店舗で販売の体験をするために仕事で使う英語の準備をするということである。そしてそれを実際に現場で実施し、うまくいったところ、いかなかったところの振り返りをプレゼンを通じて発表する。これは、Kolb の経験学習が概念化している効果的な学習のサイクルである。中級者は 1 週間に一つ目標を定め、それに向けて準備、実践、振り返りを行う。

上級者になると自身で目標を定めるようになる。例えば筆者自身の事例では野田はメンタルヘルスにも関わる専門家であるので、現地の公営精神病院に

訪問し、閉鎖病棟の視察、患者へのインタビュー、職員（看護師等）へのインタビューを行い、それを日比及び ASEAN、先進国との比較で考察、発表するというようなミッションを行った。他に後ほどの事例で出てくるように、カメラマン志望の参加者の場合、現地で展覧会を行うために、素材の撮影、ギャラリーとの交渉、運営の準備など、実際の自身の活動を英語学習の一環として実施した。

5. 研究方法

被験者は 1 ヶ月に渡り、RLE 法のカリキュラムに従い、英語学習を行う。開催場所は SPEA が所在するフィリピン国ネグロスオリエンタル州シブラン市の学校キャンパス及びシブラン市が所属する都市圏であるドゥマゲテ市の市中である。RLE のミッション自体はドゥマゲテ市の市内で行われることが多い。

前項で提案した実践的英語学習手法 RLE 法の効果を分析するために 2 種類の研究手法を用いる。すなわち、英語能力試験による得点の経時推移の確認と考察、及び参加者に対するインタビューによる事例研究である。英語能力試験は教育測定研究所が開発した CASEC 試験を用いる。本試験は英語コミュニケーション能力判定テストであり、TOEIC 及び英検に対して得点の換算が可能となっている。

被験者は 3 名である。

1. 高卒直後の 10 代男性：6 ヶ月の長期滞在の 12 週滞在後から 1 ヶ月
2. 40 代男性：6 ヶ月滞在の 7 週滞在後から 1 ヶ月
3. 30 代男性：2 ヶ月滞在の 1 週滞在後から 1 ヶ月

の 3 名である。

検査期間は 2016 年 5 月 23 日から 6 月 23 日の 1 ヶ月間とする。

表 2. CASEC テストの得点の推移

		リーディング		リスニング		合計	TOEIC 換算	英検換算
		語彙	表現	大意把握	具体情報聞き取り			
1	5月23日	73	74	130	39	316	255	3 級
	6月23日	80	105	124	102	415	325	3 級
2	5月23日	123	111	124	113	471	375	準 2 級
	6月23日	145	127	140	130	542	455	準 2 級
3	5月23日	115	121	73	105	414	325	3 級
	6月23日	110	113	146	132	501	405	準 2 級

6. 結果

まず、はじめに1ヶ月間のRLE法の授業を受けてみてのCASEC試験の得点の推移は表2のようになった。

総じて、CASEC試験の得点は上昇している。TOEIC試験の換算で3名の得点の上昇幅が70点、80点、80点となっていることから、RLE法を用いた英語学習法が英語力を下げる、あるいは停滞させる学習法であるということはないようである。

他にテストの得点から見られることとしては被験者1と被験者3のそれぞれ100点を下回っていたリスニングの項目は1ヶ月後100点を上回っていた。そのことから、著しくバランスに欠ける、不得意な要素、特にリスニングの要素についてはRLE法による英語習得はその欠点克服に効果を発揮するかもしれないということである。また、ミッションが会話中心に進むため、リスニングの得点が向上するかもしれないということである。

しかしながら、ミッションの準備では読解や作文もあり、語彙や表現の訓練もある。また、ミッション後のプレゼンテーションの準備にも当然、語彙、表現が必要な作文が必要となる。となると、RLE法もこれまでの英語学習法と同じで総合的に英語を勉強しているため、複合的に学習効果がテスト得点向上に影響していると考えられる。そして、そのRLE法としての特徴がどこにあるのかは、単純な得点比較ではなく、被験者からのインタビューの主観的体験を通して考える必要があると思われる。以下が各被験者に対するインタビューのまとめである。

1. 10代男性

SPEAに語学留学するまでは英語は全くできないという意識で、実際にテストの点数などもよくなかった。しかし、留学して5ヶ月経つようになり、英語が苦手という状況も徐々に解消されていっている。RLE法も良い原因となったと思う。RLE1を経た後の、RLE2に進むとミッションを自分で決めることができるようになる。そうすると、自分の興味のあることを聞けるようになり、また、会話が通じると嬉しいという体験ができるようになる。

具体的には、闘鶏場を見学に行くミッション、散髪に行き、バーバーの人にどんなヘアスタイルが人気なのかなどインタビューする、あるいは日本の文化を紹

介する授業を行うなど自身が興味を持ったミッションに取り組めた。

このように毎回変わるミッションに取り組めることは英語学習に効果があると思える。実際にあることだが、毎日教室で同じ先生と会話するようになると慣れてきてしまい、授業ごとに担当の先生は変わるものの、ミスをして平気という意識にもなってしまう。

しかし、外にミッションに行くと、初めての人、慣れていない人との会話やインタビューとなり、しっかり準備しないと失礼にあたる、あるいはミッションを全くこなせないという状況になるので、緊張感がありよい。

また、ミッションへの付き添いの先生とはミッション直後の学校キャンパスへ戻る経路から反省の振り返りができ、どこが良かった、どこは次に向け改善しようというアドバイスももらえるのでそこが学習に進むと思う。

そもそも私は、親から言われたから、この学校に留学をした。当初はやる気も特になかった。しかし、今はここに来て良かったと思っている。途中からもっと話せるようになりたいと思うようになった。今から思えば、もっと最初から自信を持ってどんどん話していったら良かったと思う。帰国しても英語の勉強は続けていきたい。

SPEAでの体験は英語力が伸びるという体験であるが、それだけでなく、性格が変われる場所だと思っている。日本にいた時は奥手な性格であったが、SPEAに来てからはもっと前に出ていいのだと思えるようになった。会話をしていると先生や他の学生も明るい。その雰囲気が自分を前に出させてくれる。そしてそれが自分の通常の性格になってしまったようだ。その性格の変化は自分では良いと思っているので日本に帰っても変わらないと思う。

また、自己主張もできるようになったと思う。これも、先生が会話の中で「何故だ？」と理由を聞いてくれるのでそれを答えるうちに、自分の意見が言えるようになった。

2. 30代男性

英語が伸びているという実感はない。一般論で自分の年齢だとそれほど劇的には伸びないというのはわかっているがそれでも自分の設定したラインには達していない。もっと自分の言いたいことが出てくるようになると思っていた。

例えば音楽の趣味が共通のイタリア人と会話した時も、有名なバンドの有名な曲などについては共通の知識があり、自分の意見も伝えられるが、相手がわからずに自分が伝えたいマニアックな意見などは、本当はそれが伝えたいのだが伝えられないというもどかしい気持ちになる。

大学卒業してから25年間は英語を使っていない。高校では英語の成績は10段階で6などと普通の成績であった。海外旅行などは行っていなかった。脱サラをしてニーズのある国際業務の行政書士になろうとしたことを機に、英語の勉強を始めようと思った。自身が設定した目標に対しては10段階のうち現在2グラムまでしかまだ達成できた意識ではない。とにかく話せるようになりたいので、1日8時間スピーキングでも良いと思っている。

RLE法のミッションではとにかく話せるアクティビティをということで専門職のインタビューなどを多くこなし、弁護士へのインタビューや裁判の傍聴などを行っている。

3. 40代男性

もともと、海外旅行もしていて英語に対する苦手意識などはなかった。しかし、日本で英語学校に行っていたとなると、恥ずかしいという意識が働いてしまい、周りの生徒が英語ができると失敗したくないという意識が働いてしまい、積極的には学習できていなかったかと思う。

しかし、ここでは積極的に参加できている。

うまく聞き取れない、喋れないという意識が、会話したいというモチベーションになっている。そして耳も慣れてきて徐々に聞き取れるようになってきた。また、発言の方も文章で喋れるようになってきている。先生との会話の中で単語でも拾ってこれるようになったので自信になっているかもしれない。

RLE法のアクティビティは初級の簡単なアクティビティ（街中での一般の人との会話、質問）はこれまでも旅行でやってきていた。しかし、特定の職業の人へのインタビューなどは旅行では経験できないことなので役にっていると思う。また、カルチャーショックとしてそのような専門職へのインタビューなどもすんなり受け入れてくれる寛容なフィリピンの文化に驚いている。また、様々な人とアクティビティを通じて交流することにより、その地域のことがわかり、その後街に行った時もアクティビティの時のような意識

で接することができるので役に立っている。

上級編では、個人での目的であるプロカメラマンとして世界の写真を撮るという目的に沿ってアクティビティを組んでいる。具体的には写真対象のストリートキッズにインタビュー、小学校で子供の写真を撮らせてもらう、プロカメラマンにインタビュー、写真展を開くための企画と準備などである。これらのミッションは一人で行うには難易度が高く、英語学校の授業として取り組めるのは良かったと思う。

また、そこで使用する語彙や背景知識はミッションを行う前に事前に勉強していけるので、ミッション中で例えばインタビューなどがある場合は、さも昔から知っているというような態度で入っていけるし、そもそも興味のある事柄なので英語としても覚えやすいと実感している。

以上が3名に対するインタビューの概要である。それぞれRLE法に対する感想だけでなく、留学全体に対する感想としてコメントを述べている。ここからの解釈については次項で議論する

7. 考察

本論文では、第二言語学習としての英語の学習方法として、教室内での環境における授業だけでなく、実際の生活での英語使用と、目的を明確化した手法が有効であるという仮説の元、RLE法を提案した。また、その効果を探るために、1ヶ月のRLE法による英語学習の前後での英語能力試験の実施、及びその得点推移の分析、そして、事例分析として学習後のインタビューを行った。

その結果、幾つかの考察の観点が見出された。

まず、筆記試験の結果については、学習前後で総じて被験者の得点が上がっていることが見出され、それ自体は学習が進んだといえる結果となっている。しかしながら他の英語学習手法を1ヶ月行い、得点が上がることにの相対的比較は行えておらず、場合によっては他の手法の方がより得点が上がることが想定される。

特に、英語の文法、語彙、表現などを実生活とは関係なくともその記憶数を増やそうという学習を集行的に行うと得点の伸びも大きくなることが想定される。

RLE法の場合は、実際に使用する、使用したい場面での英語力を効果的に高める手法であるので、汎用的な英語力を高めているわけではなく、必要な場面でのコミュニケーション能力を集的に高めていることにな

る。その意味では、総合的、汎用的な能力も高めるためには、併用していわゆる文法、語彙、表現などを総合的に高める学習方法もハイブリッドで行う必要があるかもしれない。しかしながら、それについては受講学生の希望に依存するため、必要に応じて取り入れられるべきであろう。

また、インタビューから得られる考察としては、被験者1は英語コミュニケーションのみならず、基本的なコミュニケーションの仕方全体に RLE 法による英語学習とフィリピンでの留学全体が寄与していたとコメントしている。これは、RLE 法が語学学習の方法のみならず、実際に触れるフィリピンの異文化を効果的に取り入れる効果もあることを指し示しているであろう。逆に言うと英語コミュニケーション能力のみの伸びをどのように測ればいいのかという構造的な問題を指し示していると言える。

被験者2の事例は、被験者の希望に従って RLE 法のミッション（アクティビティ）を組み、実施しているが本人の主観的能力の伸びは実感されないという事例となっている。しかしながら、テストの得点は伸びているので実際には使用能力は伸びていることが推察される。ここで起きている現象は、被験者の自身に対する期待値の高さと、実際の学習のスピードが結びついていないという現象であろう。しかし、理論的には被験者は本人が希望するミッションを選択して熱心に予習復習も行い学習しているので、最大限に学習するという適応過程を進めていると考えられ、自己評価の低さについては属人的な要素と考えられる。

被験者3の事例についてはミッションのテーマ設定が被験者の興味と完全位結びついたよい例であり、英語学習というだけではなく、被験者自身の今後の人生の仕事、あるいはプライベートの進む道に完全に一致した活動を英語を用いて行うという形態となっている。ここで言えることは、被験者自身も述べているように、英語学校や英語の学習方法としてこのような自身の興味に従ってカリキュラムを組める手法は他にはないので、その意味で非常に価値が有るといえることができると評価されている。

これらの事例をより大きな観点で捉えると RLE 法が提供している英語学習の手法は個別の英語能力の要素をどれだけ効果的に伸ばすかというところに着目した手法というより、英語学習を英語使用圏における異文化適応の環境に被験者を置く仕組みといえるであろう。そしてその異文化適応の仕方が、被験

者が興味を持つ課題に対して英語という言語で取り組むという仕組みを取り入れている手法となる。

そのような枠組みで本手法を捉えた時に、その効果を個別の能力（語彙、表現、文法）に分けて測り、他の手法と比較するのは理論的にあまり意味がないと言えると思われる。もちろん、ミッションで使用される語彙、表現、文法をミッション前後で比べれば、一般の学習手法で同じ期間ランダムに必要なレベルの英語知識を学ぶよりはその分野の知識は深まることが予見されるが、それは特定の分野の知識を深める努力をしているからという当たり前の結果から得られるものである。

逆に、RLE 法が提供している現実の街の中での体験というのは、総合的な経験であり、学習が行われている場所にも非常に依存する。本研究ではフィリピンのネグロス島ドゥマゲテ市という学園都市で実施しているが、被験者である学生自身は日本に比べれば発展途上国であるフィリピンの一般市民が、母語ではなく、第二言語としての英語を用いて市民生活を送っている場面への適応を図るということになっている。これは、同じ英語使用圏でも母語として使用されている欧米先進国で学習、あるいは適応を行っているのとは全く違う経験となり、その意味で局地的、局所的な英語使用体験を積んでいるといえる。

ただ、世界のどの地域でも汎用的な英語使用圏というものは存在せず、全ての地域が局所的と考えると、実際に生活で使用されている英語を現地に密着して使用するという経験は英語学習の経験の中では非常に必要とされる経験と考えられる。

その意味では、これまでの日本国内における英語学習、日本国内からスカイプなどを通じて音声あるいはビデオで現地の先生と学習を行う英語学習法では理論的に実際の英語使用場面を経験できないという欠点があり、実際の英語使用圏へ留学して学校で勉強しても学校の中だけで授業を受けている場合は、実際の使用能力を高めるための学習機会を非常に逸しているという構造があった。

それに対して RLE 法では、英語使用が行われる現場に密着し、そこに対しての教室での学習も行うので、理論的にはその現地、現場で生活するためには最も効果的な英語学習法であるといえるであろう。

最も効果的ということの数値では立証できないという難点はあるが、それは本稿でも先行研究、先行方法論として挙げた Schank の理論や Kolb の経験学習でも

同じことであり、理論的には正とされると考えられていても、それを実証する方法論は理論研究か事例研究でしかあげられない。

その構造的状況が本研究で得点比較と事例研究としてのインタビューを通じてより明確に見出された。そしてその中で今後 RLE 法がより効果を上げるために改善する取り組みとしては以下があげられる。

- ・ 学習者の英語使用の目的の明確化：事例3のカメラマン志望の被験者のように目的が明確であればあるほど、明確なミッションを組むことができ、それは既に英語学習だけではなく、その被験者の人生に関わる新たな進むべき体験となり、効果が最も発揮されるであろう。そのためには、学習前の事前カウンセリングがより重要となる
- ・ 開催場所やミッションの多様化：学習者の英語使用の目的が明確化されるとそれは英語学習を行う学校の国、文化と異なる場合がでてくることが考えられる。そうすると最も効果を上げるためには、場所などに依存しない手法の提供体制を作ることにも重要となってくると考えられる。例えば、欧米英語圏での就業が目的の場合は欧米での母語の英語が聞き取れる場所で実際の就業体験を積むことが最も効果的になる。
- ・ 学習者の適切なレベルチェックと必要な知識の提供：現地、現場での体験と同時に重要となってくるのは、学習者の総合的な英語力の底上げでもある。いくら局所的な場面での英語コミュニケーション能力をあげても、学習者が初級者の場合、必要となる汎用的な英語能力はそれだけでは補えない場合がある。その場合、併用して一般的な英語能力も学習し、それを現場で積極的に使っていくようにする必要がある。その意味で、学習者の英語力チェックとそこに対して知識として教授すべきカリキュラムも最適なものを揃えておく必要がある。

これらをまとめると、RLE 法を最も効果的に導入するには、英語学習のコーチング的要素を極力高め、学習者一人一人の目的やレベルに合った学習法を提供することが肝要であるという結論に帰結する。

8. 今後

前項の考察で述べたように、RLE 法の今後の改良は、より学習者一人一人に合ったコーチング的な学習方法

の導入ということがあげられる。しかし、これらの改良は学術的に効果を測れたりすることがなかなか推察されないため、あくまでも理論的な方法論の改善と、その実導入となろう。

また、方法論の普及のために、様々な啓蒙活動を行い、方法論の実施コミュニティを作り、コミュニティ内で方法論のブラッシュアップを図る、学会活動などで様々なコメント、批判をいただくということも進めていく必要がある。

参考文献

- [1] ベネッセ総合教育研究所, (2014) “中高生の英語学習に関する実態調査 2014”, <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356>
- [2] 株式会社バルク, (2014) “外国語に関する調査”, <https://www.vlcan.com/mr/report/081/>
- [3] 往住 彰文, (1991) “心の計算理論”, 東京大学出版会
- [4] ベルリッツ・ジャパン, (2016), <http://www.berlitz.co.jp/bj/>
- [5] Baker, C. (1993). *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters.
- [6] Prabhu, N. S. (1987). "Second Language Pedagogy". Oxford University Press.
- [7] Schank, R and Chip C. (1995). *Engines for Education*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- [8] Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning: Experience as the source of learning and development* (Vol. 1). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.